様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００１７０

研究課題名（和文）近代社会におけるモニュメントの生成・流通ー新古典主義から現代へー

研究課題名（英文）The Emergence and Distribution of Monuments from the Neoclassical Period to the Present

研究代表者
金井　直（Kanai, Tadashi）

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：１０４５６４９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：新古典主義期の彫刻《カノーヴァの墓》の分析を通して、近代的モニュメントの誕生の経緯や特質（作家性の後退とアレゴリーの復権など）を明らかにした。 また、ジュリオ・モンテヴェルデと大熊氏廣の制作活動を比較することで、近代日本のモニュメント受容の特徴、さらに銅像という日本特有のモニュメント概念登場の背景について考察した。他に、モニュメントの表象（写真や絵画）の問題や、現代の日本やシンガポールにおけるモニュメントへの創造的介入について検討し、多角的なモニュメント論を実現した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の彫刻史研究はモニュメントの生成・流通の構造を十分に説明するものではなかったが、本研究は新古典主義後期の彫刻作品の精査を通して、これを試みる点、学術的な意義大である。また日本近代のモニュメント受容を、G・モンテヴェルデ作品の調査をもってあとづける点も画期的である。近年、世界各地の多くのモニュメントが、その建立の歴史的経緯や、現今の政治的公正等の観点から批判・非難、さらには撤去の対象となっているが、そうした状況に対する彫刻史・美術史学からの応答、問題理解への礎としても、本研究の社会的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：Through an analysis of the neoclassical sculpture "The Tomb of Canova," I clarified the history and characteristics of the birth of modern monuments (such as the retreat of authorship and the revival of allegory). In addition, by comparing the production activities of Giulio Monteverde and Okuma Ujihiro, I examined the characteristics of modern Japan's reception of monuments and the background to the emergence of the concept of monuments in Japan, such as "Dozo." In addition, I examined the issues of the representation of monuments (photographs and paintings) and artistic interventions in monuments in contemporary Japan and Singapore, and realized a multifaceted theory of monuments.

研究分野：美術史

キーワード：彫刻　モニュメント　新古典主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
（１）近年、世界各地の多くのモニュメントが、その建立の歴史的経緯や、現今の政治的公正等の観点から批判・非難さらには撤去の対象となっているが、そうした状況に対して、彫刻史研究の文脈からの応答・研究は限定的である。
（２）彫刻史研究においては、モニュメントからの離反による自律性の強化（モダニズム）や、モニュメンタルなものの回避による異種混淆性の獲得（ポスト・モダニズム）が、その主たるナラティヴとなっており、近代モニュメントの誕生とその初期の展開をたどる研究は限られている（モニュメントの存在が自明視されすぎている）。

２．研究の目的
本研究は近代社会におけるモニュメントの生成・流通の構造を、彫刻史の精査を通して分析するものである。美術作品としての近代彫刻とモニュメント（いわゆる銅像や公共彫刻を含む）は、その機能において、また、研究対象として区分され続けてきたが、実際には、両者ともに初期近代において実体化する／分節される概念／ジャンルであり、ゆえに不可分の関係を有している。このことを新古典主義以後の実例に即して明らかにし、今日のモニュメント論争を再検証するための基盤・視座を確保することが、本研究の目的である。

３．研究の方法
本研究は主に３つのテーマにもとづき進められた。すなわち（１）近代的なモニュメント概念と彫刻概念が生起する新古典主義期の作例研究と（２）近代彫刻とモニュメントとの関係をめぐる調査分析、そして、（３）現代のモニュメント調査およびモニュメント論分析である。研究方法は国内外での実地（作品）調査を軸に、一次資料を含む文献調査を進めるもので、像の生産と受容の相関のなかで、形成されるモニュメントの論理と実践を探った。

４．研究成果
（１）近代的なモニュメント概念と彫刻概念が生起する新古典主義期の作例研究
初期近代のモニュメント実践として重要なアントニオ・カノーヴァ（1757-1822）の一連の作品を踏まえたうえで、彼の弟子らが制作した《アントニオ・カノーヴァの墓》（1827 年）の分析を進め、その近代的モニュメントとしての先駆的性格（作家性の後退とアレゴリーの復権、人物の顕彰や事績の記念）と、それを可能としたリソルジメント期のヴェネツィアの政治-文化的文脈を明らかにした（「《カノーヴァの墓》（1827 年）をめぐって」『信州大学人文科学論集』第 9 巻、2022 年）。合わせてジュゼッペ・デ・ファブリス（1790-1860）など、カノーヴァに続く世代の作例について、実地調査および文献調査を進め、当時の生産・受容状況のなかに、モニュメント概念の生成過程を探った。
一方、モニュメント概念と対関係をなす近代的な彫刻概念の生起については、これまでのカノーヴァ研究の蓄積を活かし、彫刻の「不可視性」をめぐる論考として執筆・公開し、写真・美術館・修復が観賞・受容上の制約／条件となり、彫刻ジャンルを特徴づける点を指摘した（「彫刻を見る困難について―カノーヴァをめぐって」『美術フォーラム 21』第 49 号、2024 年）。

（２）近代彫刻とモニュメントとの関係をめぐる調査分析
本テーマの研究の中心を成したのは、大熊氏廣（1856-1934）とジュリオ・モンテヴェルデ（1837-1917）の実作調査とそれらの照合である。大熊については川口市立文化財センター郷土資料館において、主にスケッチ群の調査を行い、彫刻家の研究や関心の範囲を把握した。モンテヴェルデ調査はローマ、ジェノヴァ、ビスターニョ、スキーオで実施。アーカイヴ調査を通して、生前の活動と評価を確認すると同時に、彼の公共彫刻の様式や設置状況を実地に調査し、その創作の展開を把握。また、近代イタリアにおけるモニュメント建立の社会的文脈を、彼の活動を通して確認することができた（とくにスキーオの《紡績工》は、アレゴリーによらぬ労働者像として重要。依頼者アレッサンドロ・ロッシの意向が強く反映された造像である）。２人の彫刻家の研究を平行して進めた成果として、とくに重要であったのは、モンテヴェルデの本来のレパートリーの広さと、大熊によるその一種の取捨選択を確認できたことである（「大熊氏廣とジュリオ・モンテヴェルデ」『信州大学人文科学論集』第 11 巻、2024 年）。これは日本のモニュメント／銅像史を検討する上で、重要な論点となるはずである。
その他、日本・イタリア各地での調査を通して、多様な「彫像熱狂」を把握することができた。とくにローマおよびジェノヴァの公共墓地調査を行えたことは大きな成果である。イズムの隆替や形態論に還元されることのない、近代彫刻史のオルタナティヴを考察する機会であると同時に、パノフスキーらによる墓碑彫刻研究の系譜に連なる点で、二重に美術史の更新を可能にする調査活動であった。
上記の実作調査に加え、写真による彫刻イメージの形成・流通に関する多角的な分析も進めた。オーギュスト・ロダン（1840-1917）およびシュルレアリスムを論じつつ、近代彫刻の脱モニュメント化の契機として、写真の重要性を指摘し得たことは、その重要な成果である（『像をうつ

す 複製技術時代の彫刻と写真』参照)。
さらに彫刻-モニュメントの表象をめぐっては、ジョルジョ・デ・キリコ（1888-1978）の形而上絵画にも着目し、描かれた彫刻-モニュメントの機能を論じた（「ジョルジョ・デ・キリコと彫刻」『デ・キリコ展』展覧会図録、東京都美術館他、2024 年)。モニュメントの「謎」、すなわち脱擬人化の契機は、デ・キリコならではの彫刻観とみなされるが、むしろ近代の公共彫刻のデラシネぶりに支えられているのではないかという主張である。今後さらなる検討を試みたい。
その他の研究対象として、アルトゥーロ・マルティーニ（1889-1947）に着目した。彼の著述「彫刻、死語」の分析を通して戦中期のモニュメントの不調を確認する一方（『彫刻 2』に寄稿)、カノーヴァとマルティーニをつなぐ期間（19 世紀中葉から 20 世紀初頭）のヴェネツィアのモニュメント造立についても作品調査を進めた。

（３）現代のモニュメント調査およびモニュメント論分析
シンガポールにおいて AIM（Artists Investigating Monuments）の展開と、それに先立つ ASEAN の彫刻ワークショップの歴史について、現地調査、展覧会調査（「Nothing is Forever シンガポール彫刻再考」ナショナル・ギャラリー、2022 年）を行った。AIM でのリー・ウェン（1957-2019）のモニュメントに対するアプローチ（パフォーマンス）には上述の著書『像をうつす』において論及している。また、ヴェネツィア・ビエンナーレ、ローマのイタリア外務省他、国内外の展示および公共空間におけるモニュメントの事例調査を進めた。「ファルネジーナ・コレクション展」をめぐるイタリア文化会館との協働（翻訳、調査、講演）はその成果公開の一端である。
国内においては、小田原のどか氏の展覧会「近代を彫刻／超克する―雪国青森編」を通して同氏による日本近代のモニュメント史解釈（大熊氏廣の制作活動に着目するものである）を再解釈し、「日本近代彫刻史への問いかけ」として公開した（「美術手帖」ウェブサイト 2022 年 3 月)。
モニュメント論について、記憶・歴史の表象をめぐる先行研究の把握を進め、上記の各調査研究の参考としたが、加えて、人種の表象をめぐる論考にも多く接することになった。この点は下記の（４）総括と課題（展望）につながる。
その他の関連研究として、豊田市美術館の展覧会図録で 2023 年に発表したジルベルト・ゾリオ論がある。意味の解体と政治的状況の呼応を分析した同稿は、後期近代～現代の「アン - モニュメンタル」な彫刻の前史をめぐる論考として位置づけられよう。
以上のような一連の調査研究を愛知県立芸術大学美術学部における連続特別講義にて逐次報告し、彫刻専攻教員との意見交換の機会を得た。

（４）総括と課題（展望）
近代社会におけるモニュメントの生成・流通をめぐって、新古典主義から現代にいたる事例を調査分析した本研究において、成果の主軸となるのは、２編の論文、すなわち「《カノーヴァの墓》（1827 年）をめぐって」（2022 年）と「大熊氏廣とジュリオ・モンテヴェルデ」（2024 年）である。前者においては 19 世紀初期の彫刻とモニュメントの切り分けを、後者においてはモニュメントからさらに近代日本の「銅像」が生起する端緒を論じ、近代のモニュメント実践の様態を詳らかにした。その他の研究成果も含めて、あらためて指摘し得るのは、形式的で自律的なモダニズム彫刻からも異種混交的なポストモダン彫刻（あるいは立体やインスタレーション）からも隔たり、えてして美術（としての評価）の外部に置かれながらも、モニュメントが強く示す媒介力である。今日のモニュメント論争をも結果的に引き寄せるその特質について、さらに分析を加えるには、《カノーヴァの墓》とモンテヴェルデ作品をつなぐ時期の作例についても検討を行うことが重要だろう。その意味で、狭義のモニュメント論からは離れるが、カノーヴァ、モンテヴェルデと同じくローマを拠点とした彫刻家、メアリー・エドモニア・ルイス（1844-1907）の創作活動には、人種の表象という点からも、とりわけ注目される。本研究を通して明らかとなった今後の課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 金井直	４．巻 9
２．論文標題 《カノーヴァの墓》（1827年）をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 信州大学人文科学論集	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 金井直	４．巻 11
２．論文標題 大熊氏廣とジュリオ・モンテヴェルデ	５．発行年 2024年
３．雑誌名 信州大学人文科学論集	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 金井直	４．巻 49号
２．論文標題 彫刻を見る困難について―カノーヴァをめぐって	５．発行年 2024年
３．雑誌名 美術フォーラム21	６．最初と最後の頁 72-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計6件

１．著者名 金井直	４．発行年 2022年
２．出版社 赤々舎	５．総ページ数 200
３．書名 像をうつす 複製技術時代の彫刻と写真	

1．著者名 池野絢子、大槻とも恵、小田原のどか、金井直、小松理虔、近藤学、坂井剛史、鈴木一平、津田大介、筒井宏樹、七搦綾乃、森佳三	4．発行年 2022年
2．出版社 書肆九十九	5．総ページ数 608
3．書名 彫刻2――彫刻、死語／新しい彫刻	

1．著者名 吉岡洋　岡田温司　津上英輔　青木孝夫　小田部胤久　加須屋明子　加須屋誠　加藤哲弘　木村建哉　樋笠勝士　前川修　室井尚　吉田寛　渡辺裕　青田麻未　上尾信也　秋庭史典　秋山聰　朝山奈津子　金井直他	4．発行年 2020年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 768
3．書名 美学の事典	

1．著者名 荒川徹、加藤瑞穂、金井直、金子智太郎、鈴木俊晴、堀尾昭子	4．発行年 2023年
2．出版社 豊田市美術館	5．総ページ数 88
3．書名 コレクション企画　枠と波（展覧会図録）	

1．著者名 ファビオ・ベンツィ、金井直	4．発行年 2024年
2．出版社 東京都美術館他	5．総ページ数 248
3．書名 デ・キリコ展（展覧会図録）	

１．著者名 チェチリア・ブラスキ、リナ・ボテロ、三谷理華、金井直	４．発行年 2022年
２．出版社 日本テレビ放送網	５．総ページ数 182
３．書名 ボテロ展　ふくよかな魔法（展覧会図録）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

レクチャー「彫刻の歴史　マーク・マンダースをめぐる“なぜ”から考える」2021年１月２３日、金沢２１世紀美術館
日本近代彫刻史への問いかけ。金井直評 小田原のどか「近代を彫刻／超克する―雪国青森編」
https://bijutsutecho.com/magazine/review/25323
講演「ヴィジョンとしてのファルネジーナコレクション」2023年3月３1日、イタリア文化会館 東京

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関